

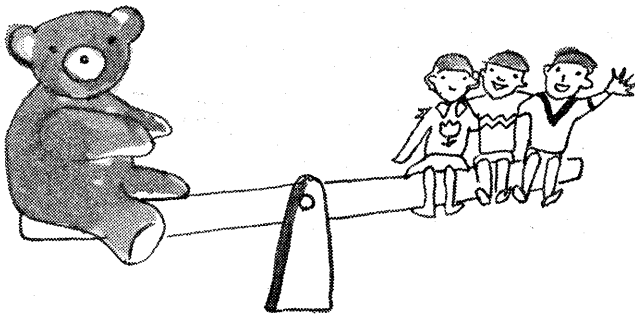
# 子どもたちのこと

## 大橋利恵子

### 四、自信をもったS子の成長

(5才児女子)

S子は三姉妹の末娘で、目のくりっとしたかわいい女の子である。明朗な性格でよく笑う。教師のしていることをにこにこ見ていたりする。ままごとや製作、積木遊びなど好きでよく遊ぶが、子どもらしい発想ができ、例えば、砂を使ってままごとをしていると、おだんごがハンバーグやケーキやいろいろなものに見たてられてい



るし、「これは〇〇のつもりね。」などと言う会話がよくできてきている。しかし、人前に出るのはすごく恥ずかしいが、自分は遊べても遊びを広める役にはなかなかないし、友だちとのつきあいも広く浅くの方であった。

そのS子の一番のりが手は給食だった。岐阜市立の公立幼稚園では小学校と同じ給食を実施している。4才の子が始めて家庭から出てきて、給食を食べるということがいかに大変なことか、容易に想像できる事と思うが、最初は食べられなくてあたりまえなのである。それでも、半年―一年近くたてば多くの子が給食になれて、普通に食べれるようになるのだが、クラスに五―六名はなかなか食べれない子が必ずいる。その子たちの半数はいわゆる偏食であるが、半数は食事の時間が長いタイプである。それでも5才児クラスになり、活動量がふえてくると食べるようになってくるが、時間がかかる子の場合、なかなか早くはならない。給食の為の食堂があるのならいくら時間がかかってもよいのだが、保育室で食べているのでそうもいかない、しかたなしにまだ食べたい

子は部屋のすみに集まって食べるようにして片づけることになる。

S子は5才クラス秋になってもいつもそのすみの席に集まって食べる二―四名の中の一人だった。S子の場合、その席にきてからいっしょうけんめい食べるという具合で、それまでの時間はおしゃべりしたり、よそ見したりしているのである。家での食事の様子を聞いても同様で、母親も早くしなさいと言う以外別にどうするわけでもなくあきらめているようであった。食事の時間が長いこと自体はたいして大きな事ではないはずなのだが、最近の小学校のいじめの話を聞くと、給食がたべれない、動作がのろい、反応がにぶい等のことがいじめの対象になるそうで、そういわれてみれば、S子は着がえもゆっくりである。一度気になると、何とかしなくては…という気持ちの方が強くなり、毎日のようにそばに行っでは「早く、ほらよそ見しないで、もう少したくさん口に入れて」とついつい口やかましく言うばかりになってしまっていた。

ある日、保育参観にドッジボールをした。男児たちは好きで以前からよくやっていたのだが、女児たちはボールがこわいこともあってなかなか入れなかった。ちょうどよい機会なので、男、女を分けて、女児と女児の父兄男児と男児の父兄で対戦した。キャーキャーと、後向きに逃げてしまう子の多い中で、S子はしっかりと胸でボールを受けとめて活躍していた。さらに時間があつて男児と混合チームになった時もS子は男児の強いボールを見事に受けて拍手をあびていた。このように集団の中でS子が注目をあびたのは始めてで、本人もかなりうれしかったようである。その日、ひとつうまく行くとすべてよくなるもので、活躍しておなかのすいたS子はさっさと給食をすませてしまったのである。日ごろ気になっていた分だけ、ほめ言葉も多くなり、S子にとっては最良の一日だった。

その日以来、S子が給食をおそくまで食べている事も少なくなり、何でも積極的に参加してくるようになった。5才児のげぎの会のセリフも長い言葉が言えた。あ

の日の自信がS子を伸ばしてくれたようである。やはり、その子の行動をよく見ていて、適切にほめることが大切だなどしみじみ思うわけである。

(岐阜北幼稚園)

